

雌阿寒岳の火山活動解説資料（令和8年6月）

札幌管区气象台
地域火山監視・警報センター

3月16日以降、噴火は観測されていません。

ポンマチネシリ火口付近では、5月中旬に火山性地震が一時的に増加して2025年9月中旬を上回る回数の多い状態となりましたが、その後は次第に減少し、今期間は概ね少なく推移しました。2025年9月から観測されていた同火口方向上がりの傾斜変動は、5月9日頃から緩やかな火口方向下がりの変動に転じています。依然として浅部はやや膨張した状態と考えられ、96-1火口の噴煙活動は活発な状態が続いています。

火山活動の活発な状態が続いており、ポンマチネシリ火口から約500mの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。

ポンマチネシリ火口から約500mの範囲では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体などの指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

風下側では火山灰や小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

令和7年9月15日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2：火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○活動概況

- ・噴気など表面現象の状況（図2-①、図3、図5-①②⑤、図6-①③、図8-①～⑥）

3月16日以降、噴火は観測されていません。

ポンマチネシリ96-1火口では、2025年9月12日以降、噴煙の多い状態が続いており、今期間は火口縁上500m以下で経過しました。

その他の各火口の噴気の高さ（いずれも火口縁上の高さ）は、赤沼火口では100m以下、北西斜面06噴気孔列では100m未満、中マチネシリ火口では200m以下で経過し、噴気活動は低調な状態です。

- ・火山ガスの状況（図2-②）

機動的な調査観測・解析グループ（防災科学技術研究所・東京大学・北海道大学）が12日に雌阿寒岳山麓で実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり90トンでした。2月から4月の観測（1日あたり300～400トン）と比べてやや減少していますが、2025年10月及び12月の観測（1日あたり100トン）と概ね同程度の水準を引き続き維持しています。

- ・ポンマチネシリ96-1火口周辺の全磁力の状況（図6-②④）

全磁力連続観測では、ポンマチネシリ96-1火口の噴煙が増加した2025年9月12日以降、96-1火口付近の地下の熱活動の高まりを示唆する全磁力値の減少がみられていましたが、5月頃から増加に転じています。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、北海道大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道、地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所及び機動的な調査観測・解析グループのデータを利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図10mメッシュ（火山標高）』、『数値地図50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』及び『基盤地図情報』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和8年7月分）は令和8年8月10日に発表する予定です。

・地震及び微動の発生状況（図2-④⑤、図4、図5-④⑦、図8-⑦⑧）

ポンマチネシリ火口付近の火山性地震は、5月中旬に2025年9月中旬を上回る回数増加がみられましたが、その後は次第に減少して、今期間は概ね少ない状態で経過しました。

火山性微動は観測されませんでした。

震源はポンマチネシリ火口付近の深さ0km付近のほか、中マチネシリ火口付近の深さ1km付近に分布しました。

・地殻変動の状況（図2-③⑥、図5-③⑥⑧、図7、図9）

ポンマチネシリ火口近傍の阿寒富士北2観測点では、2025年9月12日以降、火口方向が上がる傾向の緩やかな変動が継続しましたが、5月9日頃から緩やかな火口方向下がりへ転じています。ただし、同火口付近の浅部は、2025年9月に傾斜変動がみられる以前と比べ、依然としてやや膨張した状態と考えられます。

GNSS連続観測では、主に東側山麓の観測点で2025年8月末頃から山体付近の膨張を示すと考えられるわずかな伸長傾向が認められていますが、4月頃から鈍化しています。

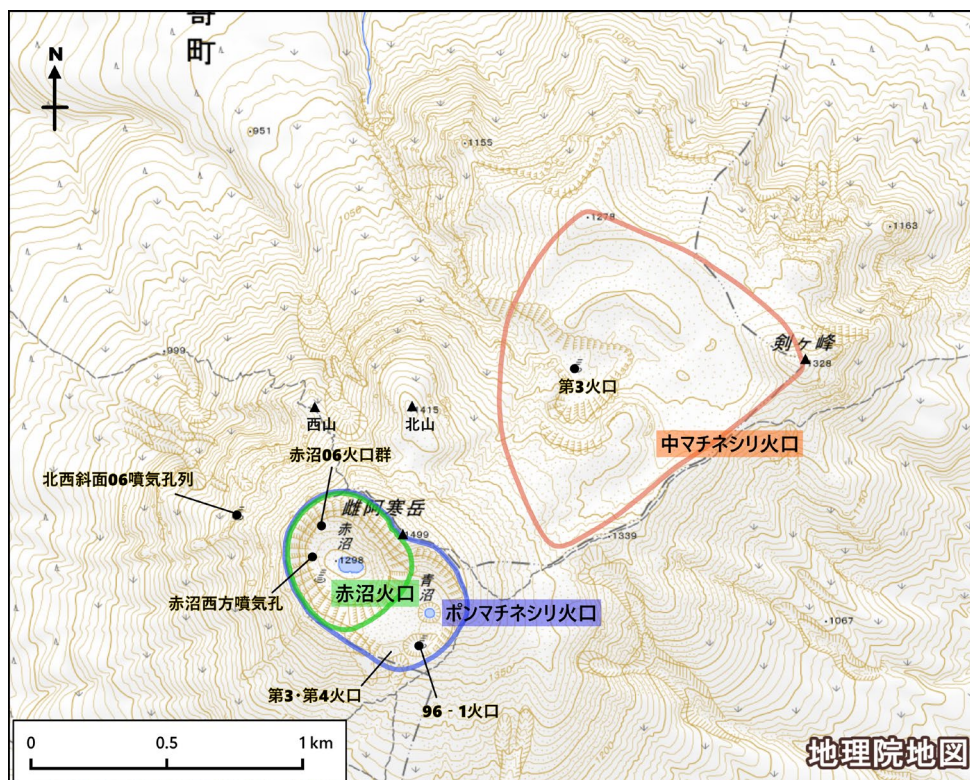


図1 雌阿寒岳 火口及び噴気孔の位置図

各火口の火口縁は、概ねの範囲を示すものです。

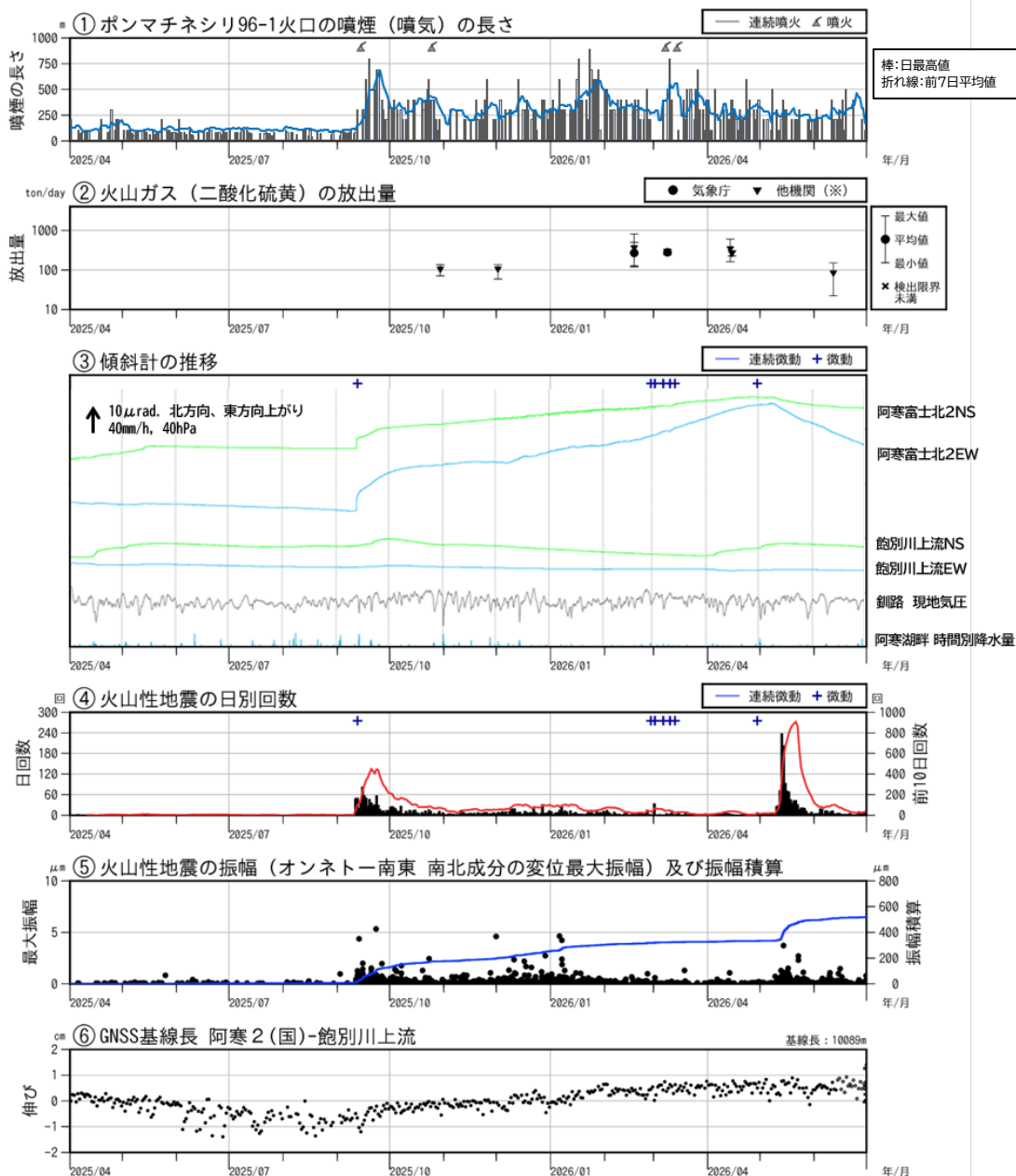


図2 雌阿寒岳 短期の火山活動経過図（2025年4月～2026年6月）

- ・①の噴気の長さについては図6の説明図を参照ください。
- ・②他機関（※）は北海道大学及び機動的な調査観測・解析グループ（北海道大学・東京大学・防災科学技術研究所）の観測を示します。
- ・③の傾斜計データは降水や気圧変動の影響と考えられる変動が含まれています。
- ・2025年9月の噴火は、9月12日から15日の間に発生したと考えられます。
- ・期間内に発生した火山性地震はポンマチネシリ火口付近の浅部で発生したものが多数を占めています（図4参照）。
- ・グラフ⑥は、GNSS連続観測の基線図（図9）基線⑨に対応しています。
- ・3月16日以降、噴火は観測されていません。
- ・2025年9月12日の火山性微動に伴い阿寒富士北2観測点でポンマチネシリ火口方向が上がる傾斜変動が観測され、以降、ポンマチネシリ96-1火口の噴煙活動は活発です。10月頃以降も火口方向上がりの傾斜変動が続きましたが、5月9日頃から火口方向下がりの変動に転じています。
- ・火山性地震は、5月中旬に2025年9月中旬を上回る増加が認められましたが、次第に減少し、概ね少ない状態となっています。
- ・東側山麓の観測点によるGNSS基線では、2025年8月末以降、伸長が認められていますが、4月頃から鈍化しています。



図3 雌阿寒岳 各火口、噴気孔の噴気（噴煙）の状況

上：上徹別監視カメラによる（雌阿寒岳の南東側から）

下：オンネトー展望台（道）監視カメラによる（雌阿寒岳の西側から）

- ・ 96-1火口の噴煙は、2025年9月12日以降増加し、その後も活発な状態が続いています。

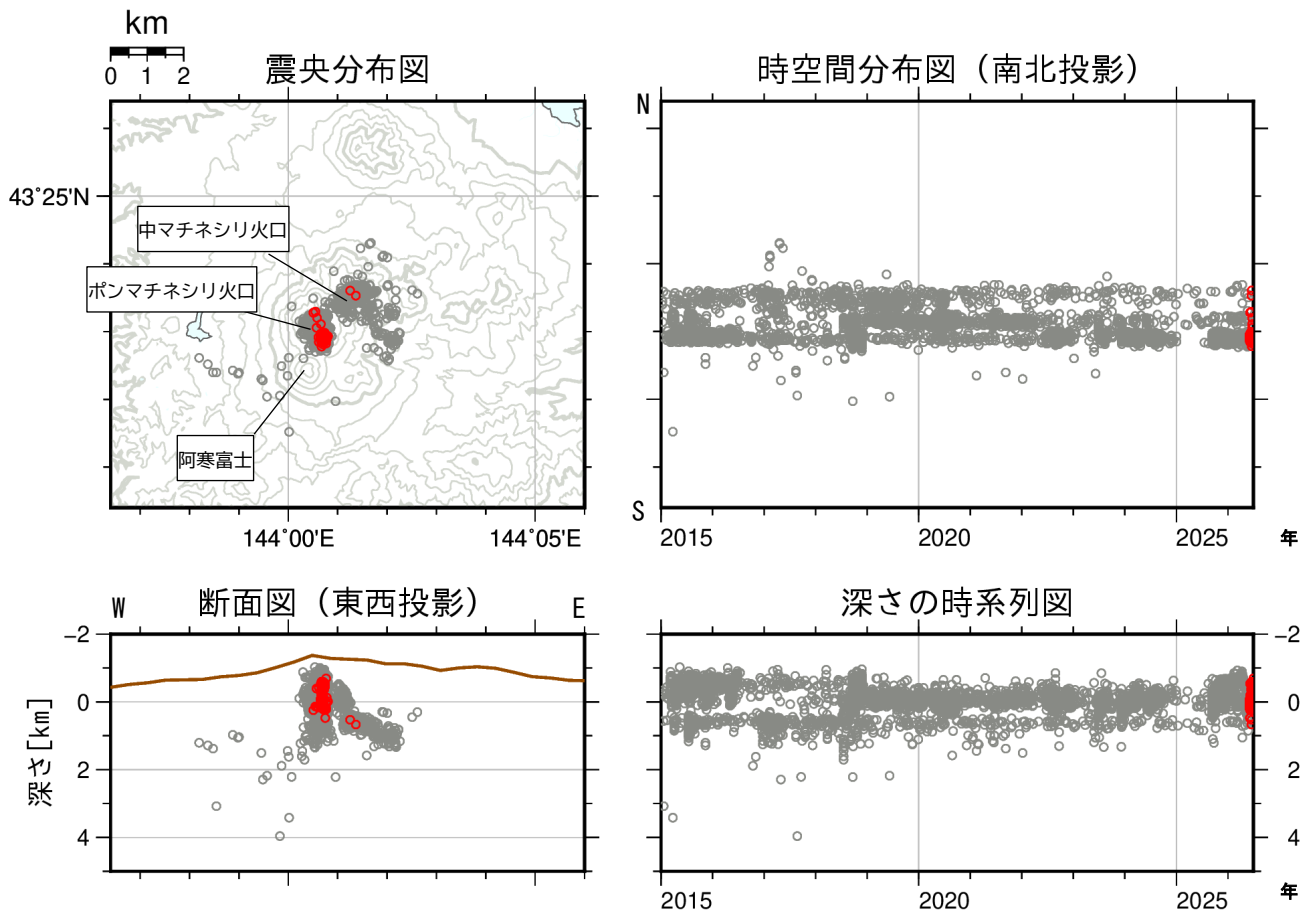


図4 雌阿寒岳 火山性地震の震源分布（2015年1月～2026年6月）
 ○：2015年1月～2026年5月の震源 ○：2026年6月の震源

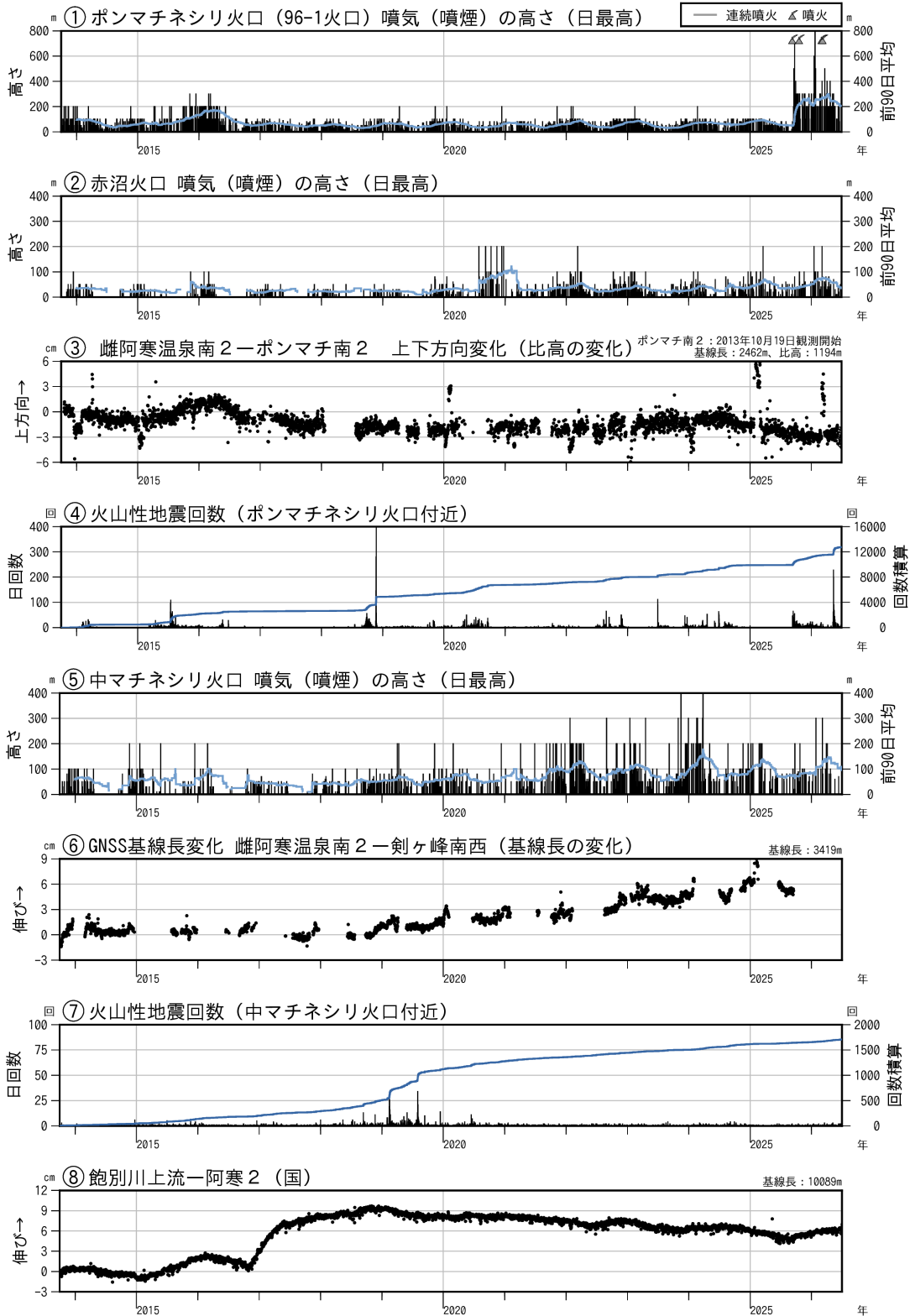


図5 雌阿寒岳 火口別の活動経過図（2013年10月～2026年6月）

- ・各火口の位置は図1を参照してください。
- ・グラフ③、⑥、⑧は、それぞれGNSS連続観測の基線図（図9）基線④、⑦、⑧に対応しています。
- ・グラフ④、⑦の回数は、雌阿寒岳付近で発生したと計数した地震のうち、発生領域が明瞭に識別出来たもののみを計数しています。
- ・ポンマチネシリ火口付近では、2025年9月以降、活発な噴煙活動が継続しています。地震は5月中旬に増加して以降、次第に減少して概ね少ない状態です。
- ・中マチネシリ火口付近の活動状況を示唆する観測データに特段の変化は認められていません。

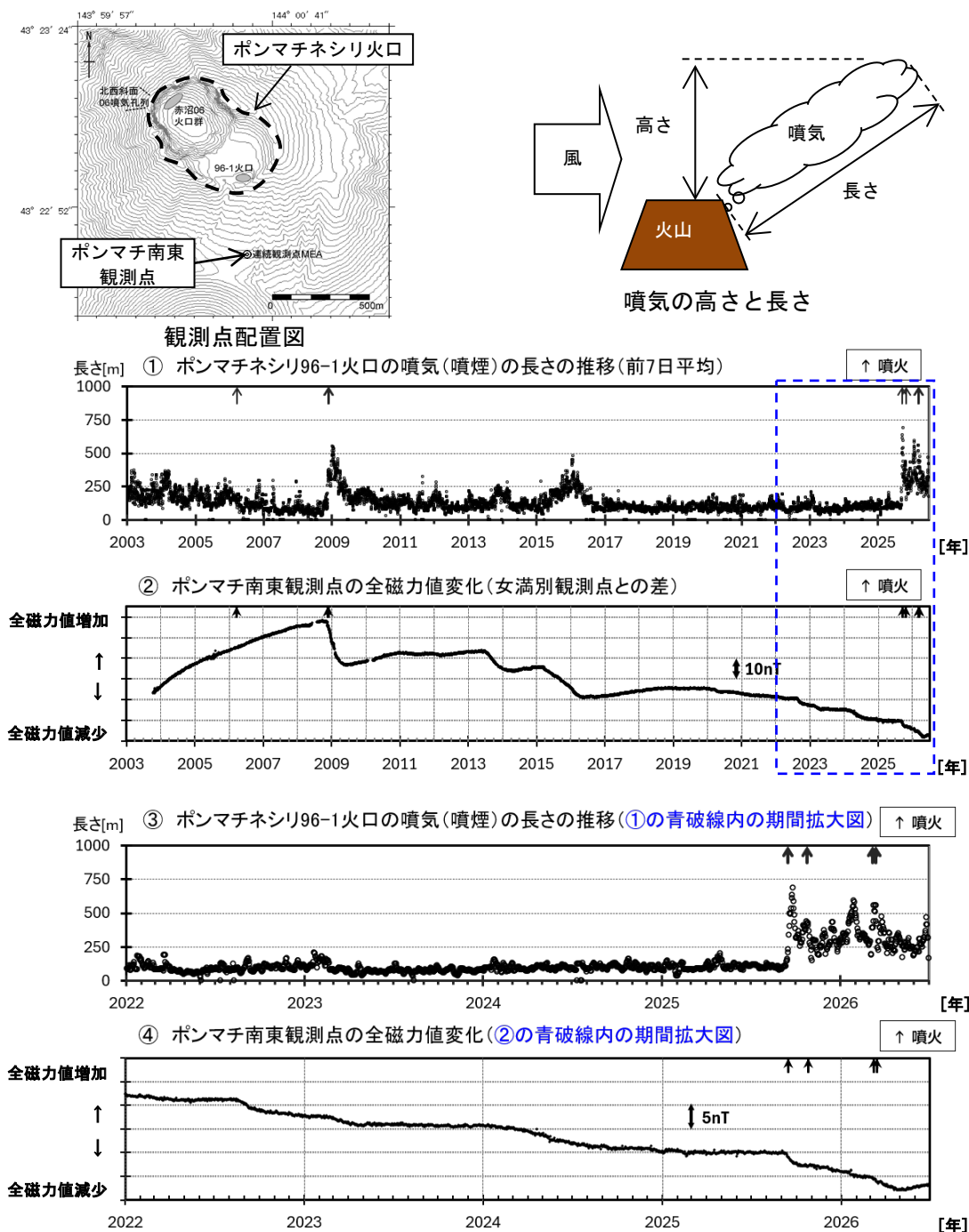


図6 雌阿寒岳 ポンマチネシリ96-1火口の噴気(噴煙)の長さおよび全磁力値の経過及び全磁力観測点配置図(2003年~2026年6月)

- ・①③のグラフに示す噴気の長さは気温の影響を受けることから(気温が低いと噴気は長くなり、高いと短くなる傾向がある)、気温補正後の値をプロットしています。
- ・②④のグラフに示す全磁力値は、地磁気観測所女満別観測施設との全磁力値差をプロットしており(表示開始は2003年10月16日)、空白部分は欠測を示します。
- ・2006年の噴火は赤沼火口からの噴火です。また、2025年9月の噴火は、9月12日から15日の間に発生したと考えられます。
- ・96-1火口の噴煙の長さは2025年9月12日以降増大し、以降も活発な状態が続いています。
- ・96-1火口南側のポンマチ南東観測点で、2025年9月12日以降、96-1火口近傍の地下における熱活動の活発化を示すと考えられる全磁力値の減少がみられ、以降も緩やかな減少傾向にありましたが、5月頃から増加に転じています。
- ・中長期的には、2020年頃から全磁力の緩やかな減少がみられています。

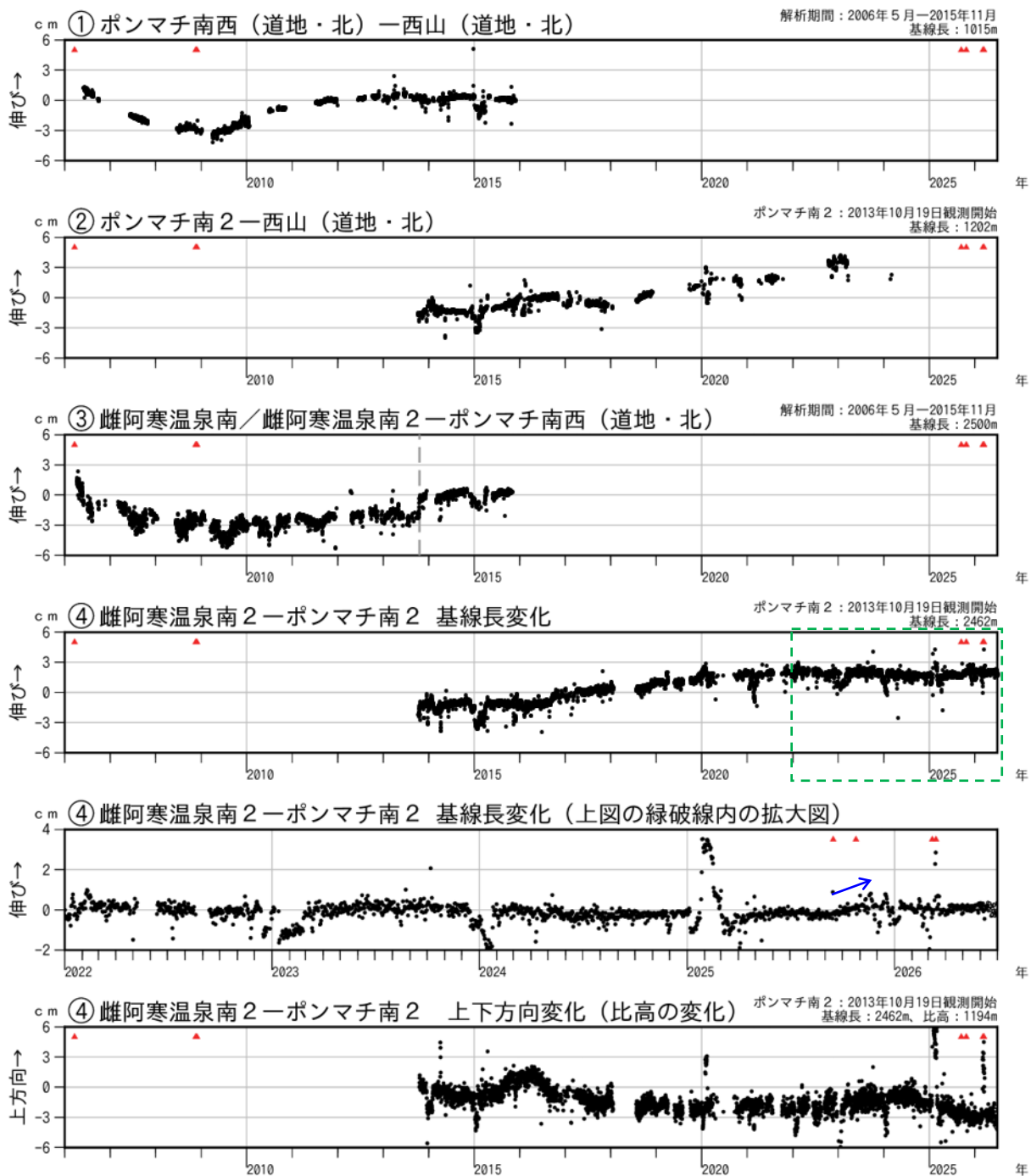


図7-1 雌阿寒岳 GNSS連続観測による基線長及び比高の変化（2006年4月～2026年6月）

- ・グラフ①～④はGNSS連続観測の基線図（図9）の基線①～④に対応しています。
- ・▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
- ・ポンマチ南西（道地・北）とポンマチ南2はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線②は①、基線④（基線長）は③と類似した推移を観測していると考えられます。
- ・基線③の破線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近隣の雌阿寒温泉南2に観測点を移設しています。
- ・グラフ④は基線④の基線長と比高を別個に描画しています。比高は雌阿寒温泉南2からみたポンマチ南2の上下方向の動きを表しています。
- ・冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。
- ・基線④（基線長）では、2025年9月中旬から11月頃にかけてごくわずかな伸長（青矢印）が認められましたが、その後、特段の変化は認められません。

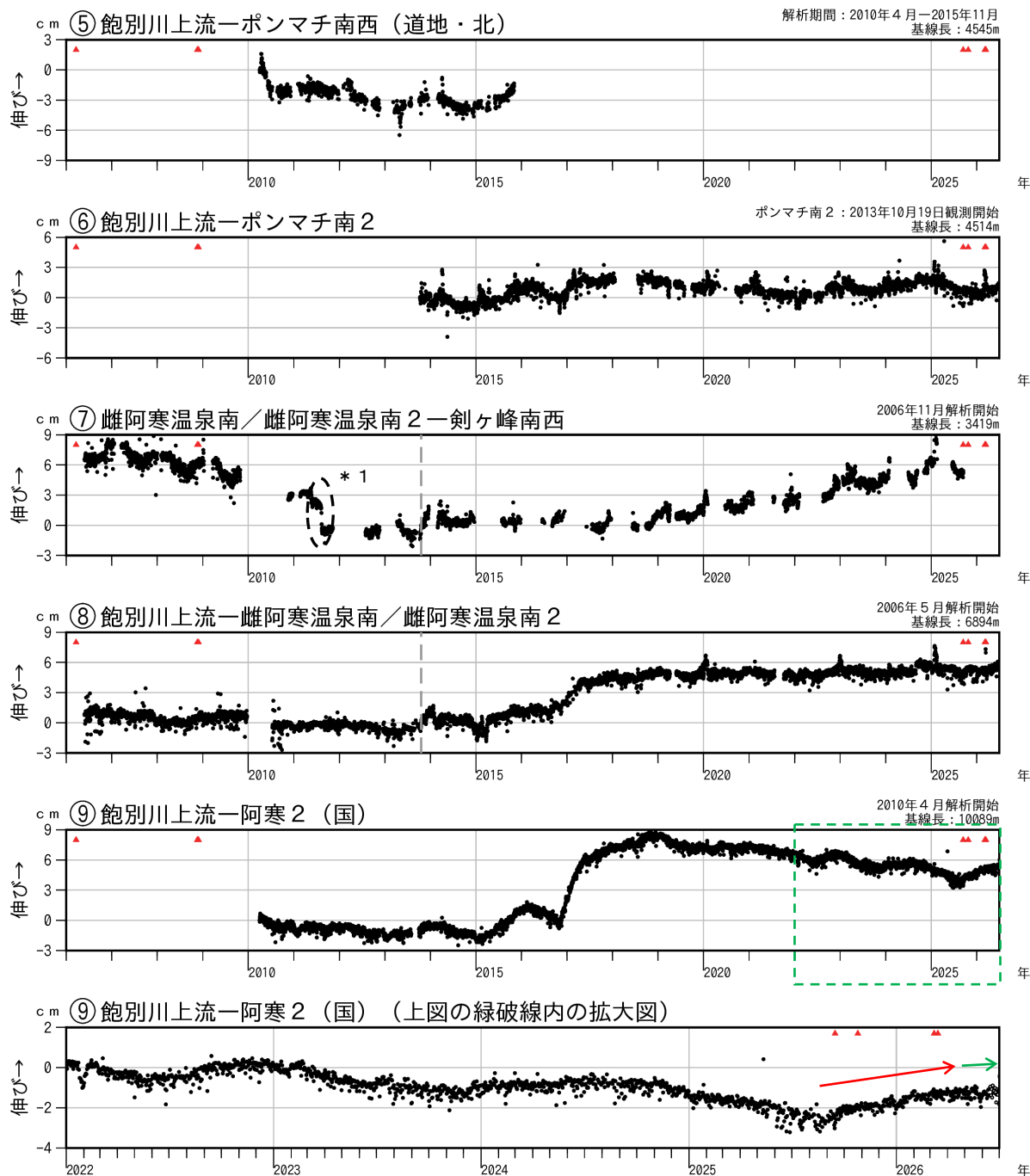


図7-2 雌阿寒岳 GNSS連続観測による基線長の変化（2006年4月～2026年6月）

- ・ グラフ⑤～⑨はGNSS連続観測の基線図（図9）の基線⑤～⑨に対応しています。
- ・ ▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
- ・ * 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。
- ・ ポンマチ南西（道地・北）とポンマチ南2はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線⑥は⑤と類似した推移を観測していると考えられます。
- ・ 基線⑦⑧の破線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近傍の雌阿寒温泉南2に観測点を移設しています。
- ・ 冬季に凍上や積雪の影響によると思われる変動がみられる基線があります。
- ・ 東側山麓の観測点による基線⑨では、2025年8月末以降、山体付近の膨張を示すと考えられるわずかな伸長（赤矢印）が観測されていますが、4月頃から鈍化が認められます（緑矢印）。
- ・ 基線⑦では2019年頃から中マチネシリ火口付近浅部の膨張を示唆するわずかな伸長傾向が認められます。

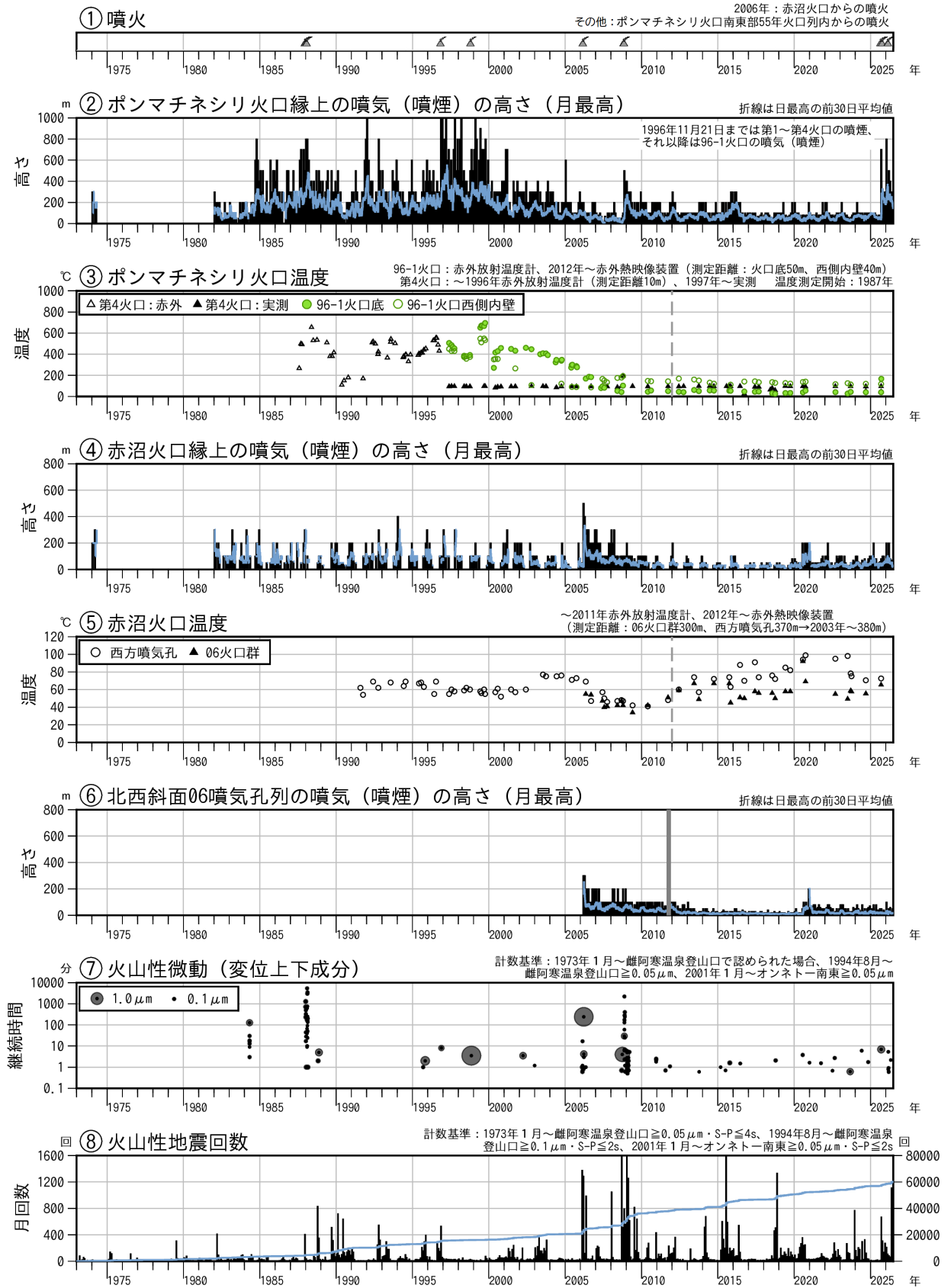


図8 雌阿寒岳 火山活動経過図（1973年1月～2026年6月）

- ・③：各火口温度は北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータを含みます。
- ・③⑤：測定機器の変更により、2012年（破線）前後では測定温度に差が生じている可能性があります。
- ・⑥：灰色部分は機器障害による欠測を示します。
- ・各火口の位置は図1を参照してください。

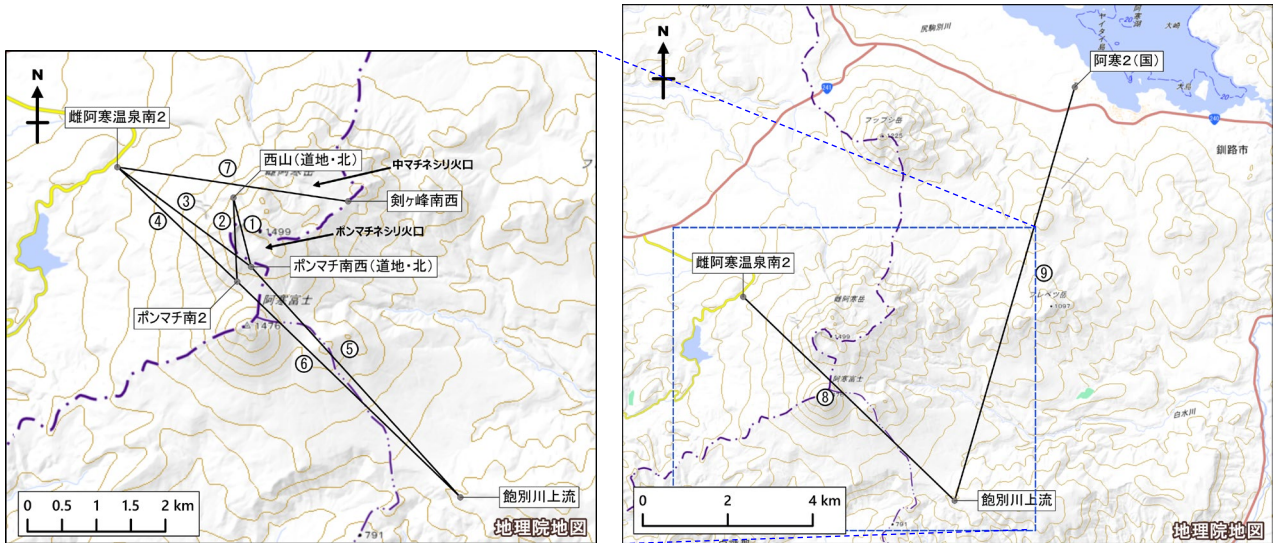
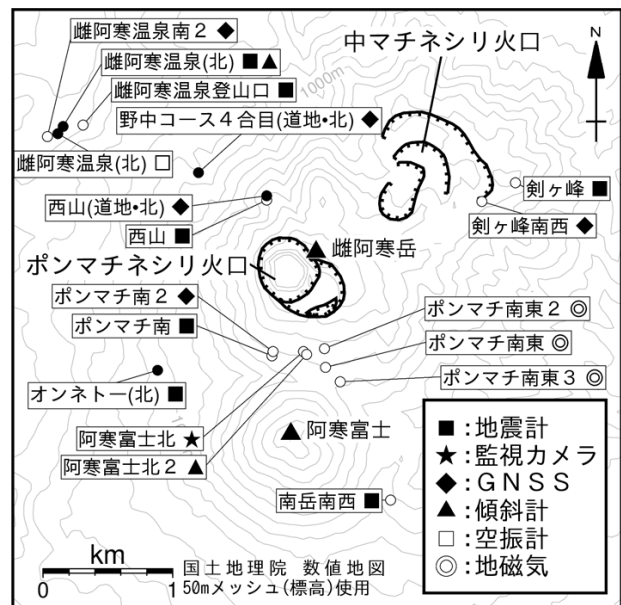
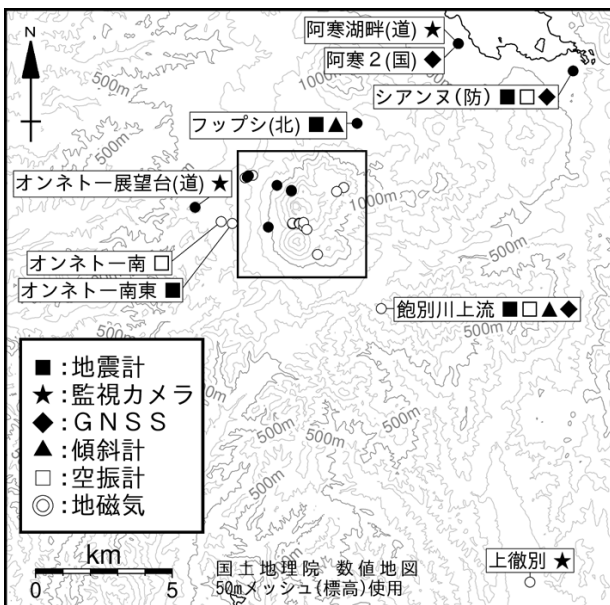


図9 雌阿寒岳 GNSS連続観測の基線図

- ・基線①～⑨は、図7のグラフ①～⑨に対応します。
- ・基線④、⑦、⑨は、それぞれ図5のグラフ③、⑥、⑧に対応しています。



小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は他機関の観測点位置を示しています。左図中の四角囲みは右図の表示範囲を示します。
 (国): 国土地理院、(北): 北海道大学、(防): 国立研究開発法人防災科学技術研究所、(道): 北海道、
 (道地): 地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所

図10 雌阿寒岳 観測点配置図